

◇ 7月の天文暦 ◇

日時	記	事
4 12	下弦	
6 2	地球	遠日点通過
7 10	小暑	(太陽黄経 105°)
8 8	月	最近
9 11	金星	留
11 5	朔	
8	水星	東方最大離角
18 17	上弦	
20 5	月	最遠
23 3	大暑	(太陽黄経 120°)
24 11	水星	留
18	金星	最大光度
26 16	望	

言いたい放題・言いたい放題・言いたい放題

日常業務からの発想

新学期が始まると、毎年、頭を痛めることが私にはある。私は、現在、いわゆる教員養成大学に籍をおいて、地学科の天文学を担当しているが、その頭痛の種の一つは、一クラス三十人程度の「地学実験」という科目があり、その中の天文学分野の講義内容をどうするか、ということである。一般の大学のみを知っている人は、教養課程での「物理学実験」、「化学実験」等々とはほぼ同等のものであると考えて結構である。物理、化学、生物の学生実験では、明治の昔から(失礼!)、ほぼ題材が出そろって、どの大学でも標準化されているものであるが、事、地学、特に、天文学、地球物理学にあつては、担当者は、私達同様、頭を悩ましておられる事だろう。なにしろ、とぼしい予算で、限られた時間帯に、数十人ひとクラスの講義をまかなうには、地球は、宇宙はあまりにも大きく、そして、その「進化」は遅すぎる。いわゆる“良心的”に、今日的な意義のある教育内容を持たそうとすれば、よほど大きい施設の下で行うか、少くとも一年間の継続的な観測実習を行わねばならないだろう。

私達のところでは、以前、貧弱な器具に工夫をこらして、太陽観測を中心にして(屋間に済ませたい!)スベ

クトル撮影等、色々の試みをして見たが、学生諸君と教官の努力の割りには、成果なしと考えざるをえなかった。そんな事で、結局は、毎年のように、大阪のスモッグで、“にじみ”の出た太陽の位置をはかり、緯度や地磁気の偏角をはかるという位置天文学の基礎を題材としたり、室内で、近距離星のHR図を作図させている。

現在、初等中等教育のカリキュラムの改訂が進められ、その事については、色々と議論はあるが、地学という学科が、一昔前の“博物学”的な色彩をはなれて、これからの人間の、自然観、宇宙観の形成に重要な位置を占めるであろうことを、関係者は胆に命ずべきであろう。そこで大学の教育をまず充実させることであるが、天文学や地球物理学というのは、考えてみると随分、ぜいたくな学問である。教育用といえども施設には多大の金が必要し、また都市公害からはなれた所にその施設を置かねばならないだろうし、学生の実習の時間帯を充分にとらねばならない。さりとて、大学に全く予算がつかないというわけではなく、最近、教員養成学部で、口径40センチ程度の望遠鏡を持つ設備を持つ所が、徐々にあるが、増えてきている。しかし、担当者にいわせれば、予算規模があまりにも、貧弱、いや中途半端である。研究用には活用出来ないし、一方、多数の学生の実習には向かないというのが現状ではないか。

より大きい立派なものを、より多く……とさげんでも政治的効果のないことは世のならい。現実的に、可能な線を提案すると、個々の大学に別々に投下される設備予算を加えあわせた金で、地方ごとにグループを作り、立地条件のよい所に共同利用の観測施設を作った方が、よほど効率が良いではないか。そこに、中口径望遠鏡をはじめ、多種、多数の観測器具をそろえ、宿泊施設を整える。毎年、プログラムを組んで、各大学の学生の実習のための合宿、専攻学生の継続的観測を順に行う。

私自身は、大学行政には暗く、大学の「壁」がどの程度の堅さかは知らないけれど、その「壁」はいずれは、つぶされるか、穴をあける必要にせまられるだろうと思っている。最近、大学の間で共通の講義を開講するという試みが行われているか、教育施設の共有共同利用という例は聞いたことがない。はたして本当に不可能なのだろうか? この共同利用の観測センターの具体化について、関係者と討論したいと思っている。そのセンターが出来るまでの講義内容についても……。

(大阪教育大学地学教室 横尾武夫)

